

「おじいちゃんが倒れて運ばれた。すぐに病院へ来てほしい。」

いつものように母と、笑い声を上げながら私の大好きなテレビ番組を見ていた、まだ肌寒い夜のことだった。その笑い声を遮るように、母の携帯から聞き慣れた着信音が流れた。どうせまた祖母だろうと、私は気に留めることなくテレビに見入った。しかし、しばらくすると背後から泣き声が聞こえ、振り返ると、そこには涙でぬれた母がいた。何度も「うん」と、声を震わせながらただそれだけを繰り返す母がいた。私は驚き、何があつたのかを聞くこともできなかった。何もできないまま、ただ見つめることしかできなかった。

私達が駆けつけた時には、祖父は特別室でたくさん機械に囲まれながら眠っていて、どれだけ声をかけても少しも動いてくれなかった。

祖父は二年ほど前から、胆管癌という転移する確率が高い、悪性の癌にかかっていた。そのせいで視力は低下し、あまり自由に歩くことができなかった。それでも、私が遊びに行けばいつも「よお来てくれたなあ。」と言っでは、本当は足が悪くて動きづらはずなのに、自分が座っていた座布団のある席に私を座らせようとしてくれた。座った瞬間から、身があたたまるような感覚になり、あの何とも言えない感じが私は大好きで、そこはいつの間にか特等席になっていた。

そんな、いつも温かく迎えてくれた祖父を思い出せば思い出すほど、胸が苦しくなった。祖父の手を握りながら心の中で「助けてください」そう祈った。そして祖父は、奇跡的に一命をとりとめ、入院はそのまま続けなければいけなかったものの一時期は話せるようにまでなった。

それから何日かが経ち、祖父の家に行ったある日のことだった。仏壇に向かって祖母が何かつぶやいているようで、よく聞いてみるとこう言っていた。

「今年もどうか、どうか最後にあの花火をおじいちゃんに見せてあげてください。お願いです。他には何も望みませんから……。」

祖父がそう長くはないと知っていた祖母は、よくお願いをしていたと後で知った。

その花火とは、武生花火大会のことで、毎年夏になると開かれ、我が家にとっては一大行事だった。祖父の家のベランダからはよく花火が見え、そこから見る花火は絶景だった。親戚が集まることなど、普段はあまりなかったが、その時だけは、毎年必ず皆で花火を見ることかいつの間にか当たり前になっていた。

しかし、花火大会の一週間前に祖父は亡くなった。その年はいつも祖父が座っていた場所を開けての花火大会となった。祖父が倒れた時から、自分の中で覚悟はできていたはずなのに、いざそうなると受けとめきれず、その日はみんなと離れて一人で花火を見ていた。花火も終わりに近づいた頃、母は私のところへ来て、一言言った。

「おじいちゃんはね、よく『今の夢はなあ、ゆいが二十歳になったら、じいちゃんが最初に乾杯して祝うことなんや。ああ、楽しみやなあ。』とよく言っていたのよ。」

その瞬間、晴れた夜空に、大きくてどこまでもきれいな花火が一つ、また一つあがった。祖父はあまり語らない方だったから、驚きを隠せなかった。その夢をまだ叶えてないのにどうして、どうしてそんなに早く……。祖父を責めてしまった自分がいた。悔しかった。急に目頭が熱くなり、私の目には大きくてはかない、色鮮やかな花火がうつりこんだ。やがて視界がぼやけ、その花火もぼやけていってしまった。祖父も天国で今見ているかなと思いつつ、私はもう一度ぼやけた花火をみつめた。

その時から私は決めたことがある。それは二十歳になったら、いつも祖父が座っていたあの特等席でお酒を飲むことだ。天国に行ってしまった祖父の夢を叶えることはできないけれど、あの座布団の上でなら二十歳を祝ってくれる気がするから……。